

明治33年における聖護院の大峰入峰記録

小 田 匡 保*

はじめに

修験道の修行の中で最も著名な大峰入峰については、これまでさまざまな研究や報告がなされてきた。しかしながら、近代の入峰修行に関しては、十分な研究が行なわれてきたとは言いがたい。その理由の1つは、関係史料の入手しにくさにある。筆者は前稿¹⁾で、聖護院の機関誌『修験』を主な資料として、近代の大峰入峰について検討を行なったが、『修験』は大正末期～昭和戦中期の刊行であり、それ以前の状況については、その他の断片的な史料に頼らざるをえなかった。

ところが、最近、登山家の森沢氏が、園城寺法明院所蔵の明治期の入峰記録を発掘し、同氏の著書『大峯奥駟道七十五靡』の中で、これらの史料に言及している²⁾。園城寺の福家師は、同寺に明治期の3つの入峰記録が所蔵されていることを紹介し、そのうちの1つである明治31年の入峰記録「大峰山奥駟修行日記」(園城寺勸学院所蔵)を翻刻している³⁾。また、青谷は、現在、史料整理が進められている聖護院所蔵文書を利用し、明治16年に大峰入峰修行が公式に再興したことなどを明らかにした⁴⁾。

筆者は、森沢氏と法明院住職・滋野敬淳師のご好意により、同院所蔵の明治期の入峰記録3点の写しを入手することができた。そのうちの2点は、福家師の論文で簡単に概要が紹介されているものである。本稿では、福家師の論文では触れられていないもう1点の記録である明治33年の入峰日記「大峯山奥駟日誌」を翻刻し、

今後の研究の資料として提供したい。

本記録の内容の概略について紹介しておく。この日誌は、明治33年(1900)9月3日～19日の大峰入峰記録である。大まかな行程は次のとおりである。9月3日に聖護院を出発し、京都駅より列車に乗って、葛駅(現吉野口駅)で下車し、大淀町の^{ひがいもと}桧垣本に宿泊。4日は吉野山の喜蔵院宿泊。5日、洞川、6日、山上の喜蔵院と進み、7日は小篠で護摩をたいて、山上にもう一泊する。8日から奥駟に入り、8日は弥山泊、9日、前鬼泊。10日は裏行場修行を行い、前鬼にもう一泊。11日は尾根道に戻り、怒田宿に泊まる。12日は上葛川の森下家に宿泊。13日は、玉置山を経て、切原泊。14日は、吹越で護摩をたいた後、舟で熊野川を下り、新宮泊。15日は那智山まで行き、天候と時間の都合で大雲取越えをあきらめ、那智山で泊まる。16日は、大雲取・小雲取を一気に越え、湯峰のあづまやに宿泊。17日は本宮に参拝して小辺路に入り、十津川村の西中に泊まる。18日は伯母子峠を経て、高野町の大滝に宿泊。19日は高野山参拝の後、橋本から列車に乗り、夜10時20分に聖護院に帰院している。前稿⁵⁾で、明治20～30年代の入峰は、基本的に9月に行なわれていたと指摘したが、明治33年もその例に漏れないことが分かる。また、大正末期以降や判明する明治期の他のルートと違って、熊野三山参詣後、小辺路をとって京都に帰っているのが目につく。

参加者は、聖護院出発時に修験者4名(岩本・岩月地・著者・渡辺)と荷持ち・案内が2名(高田・辻)。京都駅で荷持ち1名(上田)と

* 駒澤大学地理学教室

待ち合わせ、吉野山でもう1名(中野)と合流する。小篠での護摩の後、筆頭修験者の岩本と岩月地、荷持ち1名(上田)の計3名が帰り⁶⁾、入れ替わりに俗人4名(伊藤・正井・滝本・水野)の随行を認める⁷⁾。したがって、奥駟の人数は、修験者2名、荷持ち3名、随行4名である。明治期の奥駟が数名程度で行なわれていたことは、前稿⁸⁾で述べたとおりである。前鬼からは、そこで修行していた俗人1名(藤田)も一行に加わる。これらの随行者は、上葛川、那智山、王寺で別れており(1名は場所不明)、湯峰でいったん別れて五條で落ち合えなかった荷持ち1名(中野)を除き、京都帰着時には修験者2名と荷持ち2名であった。

入峰日記の著者は、表紙に「園城寺内北谷/勇健房良順」とある。本文中、山上での修行と最後の京都帰着時の記述に、何の説明もない「田村」という人名が3カ所登場するのは著者のことではないかと考えられる。とすると、著者は田村良順なる人物であろうか。いずれにせよ、本史料が法明院に所蔵されていることから、法明院関係の人物と思われる。

翻刻にあたって、いわゆる旧漢字は現在通用のものに改めたが、「峯」や「嶽」など、原表記のままにした場合もある。句読点、中黒は翻刻者が補った。()と「」は原文自体にカッコ書きで記してあるもので、〔〕内は翻刻者の注記である。カッコのないルビは、原文に付されているものである。字句の上に取り消し線を引いてあるのは、見せ消ちの部分である。原文で少し段を下げて書いてあるところや原文中の改行は、翻刻でもそのようにしたが、字下げ・改行なのか判断に苦しむ箇所もあり、必ずしも厳密ではない。

最後になるが、本稿執筆の途中、法明院の滋野敬淳師が去る10月26日に逝去されたことを知った。衷心よりご冥福をお祈り申し上げる。また、翻刻にあたって御高配を賜った滋野敬宣

師と福家俊彦師、判読にあたって多くの御教示をいただいた青谷美羽氏に厚くお礼を申し上げたい。

注

- 1) ①小田匡保「近代における大峰の入峰ルート—戦前期の聖護院の入峰を中心に—」, 山岳修験 36, 2005, 25~39頁。②小田匡保「戦前期の大峰入峰における山岳修行前後の旅程と社寺参拝」, 駒澤地理 43, 2007, 19~38頁。③小田匡保「戦前期の大峰入峰における「古式」の復活—撫物の捧持と吉野川での水浴—」, 駒澤大学文学部研究紀要 65, 2007, 37~46頁。
- 2) 森沢義信『大峯奥駟道七十五靡』ナカニシヤ出版, 2006。
- 3) 福家俊彦「近代以降の本山派大峰奥駟修行」, 大阪商業大学商業史博物館紀要 7, 2006, 41~62頁。
- 4) 青谷美羽「明治前期の本山派と大峰修行」(『近現代の霊山と社寺・修験』國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」, 2007) 19~24頁。
- 5) 前掲注1) ①29頁。
- 6) 青谷は、明治14年の内々の大峰修行や明治16年の入峰で9月11日が「駟出」であったこと、明治17年・18年の入峰でも、聖護院住職が9月2日に出発して11日に帰院していることを明らかにしているが、明治33年の本記録から判断すれば、小篠での護摩が終了した後、奥駟せずに聖護院に帰院したものと考えられる。前掲注4) 22~23頁。
- 7) 十津川村上葛川 森下家所蔵の明治期の碑伝には、「随行」や「随行者」の氏名が記されているものがあり、前掲注1) ①29頁では山先達や一般信徒と解釈したが、本記録

から判断すると、峰中での飛び入り参加
だった可能性がある。

8) 前掲注1) ①29頁。

史料紹介

〔表紙〕

明治卅三
年九月 大峯山奥駟日誌
園城寺内北谷
勇健房良順

〔「法明院印」の角印あり〕

〔本文〕

開始

九月三日 月曜 八月白十日

〔梵字部分を線で指示〕 〔「奉」以下を線で指示〕
曲尺五寸以内 是より以下一尺一寸五分

明治卅三年

〔梵字〕 奉奥駟修行金峰七十五靡
九月吉祥日

大本山聖護門跡代理

行所 天長地久 玉體安穩 祈攸
興隆正法 百穀成熟
一乗沙弥良順等同行敬白

右裏面ニ、同行悉皆記名スル事。

右ひで十二枚認む（前一日即チ九月二日
なり）。十二枚内九枚ハ、唯大本山聖護院門
跡□□り。

初第一日

門室発、八時半。宸殿前及本堂にて勤行。熊
野神社法楽等致し、鴨川東道を三条大橋・小
橋・寺町通を経て、五条に至り、西に折れ、東
本願寺前鳥井に大休。御門主及岩本恭随師、其
他在京法類、神変講社各組送り来ル。

九時四十五分発奈良鉄ニ乗ルベキ処、少々チ
〔遅〕刻之為、一時余ニ待居にハ実ニ閉口せり。

修行者

黄色鈴掛 茶房結袈裟 貝緒赤 岩本慶雅師
全 青房結袈裟 貝緒赤 岩月地善明氏
右二氏、山上迄
全 紺房 貝緒茶 小生
全 有紋 白房 貝緒赤 渡辺栄玉氏

荷物取扱者及案内

上京区小川通立売下ル 高田金太郎氏
河内国南河内郡国分村 中野喜造氏
山城久世郡植〔榎〕島村 辻久吉氏
右内、中野ハ芳野より随行の事
七条より丹波滝郡多紀郡今田村大字下立杭
上中〔上田カ〕貫三氏従来

漸クにして、十一時五分発列車に乗ル。

西には東寺の大塔、巖〔巍〕峨たる状。東ニ
伏見之兵宮之整頓せる態。漸ク進テ宇治川、有
名なる鳳凰堂等、目を喜はずに暇あらず。軌道
之両側ニハ一面の茶園。間ニ梨子畑等あり。木
津川を超へ、一のとんねるを過ぎ、大和の境に
入れハ、東方ニ人目を驚かす大伽藍現る。是即
チ昔時の盛都たゝりし奈良。隆盛の遺物たりし
東大寺の大仏殿、興福寺の五重塔・南円堂、東
大の二月堂等、樹林及家屋の中に起立し、広大
なる事驚クベシ。東大寺東ニ当り、一のはげ山
あり。是即チ有名なる三笠山。其東ニ森々たる
樹林あり。是即チ春日神宮なり。后一時ニ至り、

汽車ハ汽笛を吹き、進行を止む。一行下車して、荷物を尋ぬれハ、更ニ無し。

大注意 七条停車場にて荷物を預クルニ、官鉄に預クレバ、即時乗車スル由。然るニ、生等私設停車場、即チ南方ニ回リて預けし為ニ、一列車チ〔遅〕延せしめられたる由。已後ハ必ず官鉄の方へ預クベシ。

生等一時五十一分発列車に乗ル。西にハ西大寺・郡山城跡ノ勝境、法隆寺大伽藍等をなかも、王寺にて乗替、高田にて乗替。三時五十分、葛着下車。停車場前、宋田屋にて小休(二十分)。当所ニ京屋文雄使待居。依て荷物を柙し、是より徒歩。車坂峠を越、中腹にて電雨に逢ふ。困難を感せし処、頂上ニ休憩所アリ。依て小休。西瓜等の饗応ニ会す。ざん〔暫〕時にして止む。二十分の後発し、人家の処ニ至り、道を誤過たんとせし処、善人の忠告ニ逢ひ、過たつ。吉野郡大淀村大字繪會垣本、京屋文雄方へ六時着宿。高田氏等ハ、一時余ヲク〔遅〕レ来宿。小生、薩摩芋之饗応を受ク。

王寺より葛迄の間、名所多シ。東にハ敵火^(ママ)山、西にハ二条岳〔二上山〕・金剛山等、実ニ昔時之事蹟を思はしむ。

京屋文雄方ハ、南方ニ吉野川をかまえ、川をへだて、南方・東方等、四面皆山。観月等にハ宜しからん。取扱ハ可なり。風影ハ宜敷候。

十時半臥床。

第二日 九月四日 夕方雨 午後一時頃
雷雨 火曜 白十一日

午前四時半起床。五時四十分出発。六時半、六田。一全、川流に身を投し、游泳せり。川前

勤行あり。七時発。七時二十五分、柳宿行者堂参拝。金拾銭、小児ニ施す(一厘銭ナリ)。七時五十分、吉野宮参拝。金拾銭の神饌料。茶の饗応に接す(吉野ハ益々宜敷く相成候。眺望所等の設立、又全所にてハ吉野川を眼下ニ見、遥ニ多武峰を望むるを得。昨年御遠忌入峯之際、設立始まり居りしもの)。八時十分発。八時二十五分、杉林中にて、喜蔵院よりの迎人及岩本弥一氏・中野等ニ逢ふ。八時半、村上義光の墓前を過ク。八時卅五分、一目千本、即皇后宮野立の跡を過ぎ、八時四十分、休所加藤寅吉方にて休憩(七分間)。八時五十五分、発心門。九時、二王門(二王ハ運慶作)。九時五分、蔵王堂勤行。次ニ天神宮勤行。九時二十五分、喜蔵院着。

吉野川に至るや、昔之後醍醐天皇の御心勞、楠氏の忠、大塔宮の御苦戦等、むね〔胸〕ニ満つ。漸く進むにしたかひ、村上父子の忠、昔時の吉野一日千本之実等、俛そ〔險阻〕なる有様も思はれ、二王門に至れば、運慶のけつ〔傑〕作、蔵王堂にて、高祖の大願も思わる其尊像の大なるコト、驚くに堪へたり。

金剛杖

〔梵字〕胎蔵権現

〔梵字〕大峯八大金剛童子守護

〔梵字〕金剛蔵王

〔梵字〕正大先達 姓名

〔梵字〕葛城七大金剛童子守護

〔梵字〕明治卅三年九月

已上三本認む。

岩月氏、后、竹林院及東南院ニあいさつに行ク。従者、上田貫三氏。

午後二時二十五分発にて、小生・岩月地・渡辺・高田・辻・上田等六人、如意輪堂へ向。二時五十分着。参拝。宝物を拝観す(拝観料各三

錢。住主の申すに、五錢なれとも三錢にして置きます。嗚呼、腐れり。形式も出来ぬとハ)。後醍醐天皇御陵参拝。三時二十分出発。三時四十分、吉水神社参拝。南朝の皇居たりし殿宇、今猶存せり。殿宇の狭小なる誰か涙を落さざる。四時、喜蔵院ニ帰院す。

如意輪寺の宝物、小楠公の遺歌の戸扉の如き、字未ダはんせん〔判然〕せり。蔵王権現ハ高祖作、威風凜々たり。厨子ノ画ハ金岡の筆、賛ハ^(ママ)御醍醐帝之律言、其他見べきもの多シ。吉水神社にも宝物一万余程ありと云ふ。

本院に宿泊者四十名程見受。
岩本師ハ、採燈師之故を以て別室なりき。
本日、檜垣本より一人荷持をやとう。昨日、葛迄迎人料と合て四十五錢。
臥床、午后九時。

奥通願出人
三河国西加茂郡野見村大字御立 水野鉄五郎 山上にて再会之事

第三日 九月五日 水 白十二日

起床四時。新宮町佐々木天龍氏へ、奥駟修行云々、宿泊依頼報知^(ママ)(姓名ハ義長氏ニ問合)。午前六時出立(喜蔵院主同道)。荷物二人随ふ。七時十分、才谷。川辺竹次店にて小休(ころ橋とも云ふ)。是迄小跡露多シ。地蔵峠にかゝる前、人家の処にて、喜蔵院主・岩本師と別れ、鳳閣寺に向ふ(真言宗)。八時、貝本富太郎方に、鳳閣寺什宝、蛇骨及法螺、見覽す。八時二十五分、百螺山鳳閣寺、理^(ママ)現大師参拝(貝本妻案内)。

蛇骨ハ、耳と覚しき処、四寸五分長サ、頸骨三枚迄一尺五分。実にななるものなり

(聖宝退治のもの)。法螺ハ、蛇退治の時の用具と云ふ。

百螺山と云ふハ、右退治の時、現今存在の貝を用ひしニ、恰も法螺百箇〔

〕蛇も害する能ハズ。終ニ氣絶たを〔倒〕れたりと云ふ意なりと云ふ。右二品住職留守之為、貝本方に預り居ルト云ふ。

鳳閣寺にハ古仏四五体あり。蔵王権現尤もよし。

九時二十分、河戸菊屋着。中食。全所にて岩本師等に会す(菊屋ハ昨年焼失し、本年春新築と云ふ)。十時三十五分発、十一時(西村手代迎ヒニ来り居れり)。十一時十五分、松の茶屋小休。行者堂勤行あり。〇時二十分、米捨峠、行者堂参拝(小休)。餅等食ふあり。一時、龍泉寺着。勤行三ヶ所、本堂(弥勒)・不動堂・八大龍王堂(当堂ハ本年の造宮にかゝる)。凡て院内清潔。清泉あり。一時五十分、西村清五郎方着宿(当家にも新造宅あり。矛入始と云ふ。壁等未ダ成らず)。

端書、大津へ出す。一切之報知。

龍泉寺ハ寺院たるニ恥ズ。住職如何なる人物か、境内清潔、益々宏大に向ふが如シ。

臥床后十時。

^(ママ)
第三日 九月六日 木 白十三日

起床五時半。

七時出発。七時十分、とうろう窟、二十分、こもり窟(窟最も面白し)。七時三十五分、一ノ行場(小休)。七時五十分、母子堂勤行。八時二十五分、一ノ宿勤行。九時五分、一本松(母子堂より本年ハ洞辻迄、新道の開設あり)。九時五十分、洞辻勤行。十時十分、ダラ尼助屋前(凡

ソ二十余戸、二ツニ別レ、二列ニ列れり)。十時二十分、小屋懸勤行。十時二十五分、金懸修行(田村・渡辺・上田。先達ハ高田)。小亀石・とうか窪を経て、十時四十八分、喜蔵院宿坊着。中食。

大護摩(山上本堂前。一時頃より本堂ニテ勤。即時大護摩に係ル。二時頃乞〔訖〕り、帰宿)。四時二十分、西望^(ママ)修行(先達、高田)(修行者、田村・渡辺・上田)。四時半、裏行にかゝり、たい〔胎〕内くゝり、さいの川原、天の川、とひ石、東ののぞき、蟻のとわたり、びようど石等を経て、四時五十分畢。五時十分、御花畑。夫より帰宿。

西ののぞき、最もよく、東ののぞきハ、下ルニけん^(カ)のん〔剣呑〕。蟻のとわたり、びようと石等ハ、面白く且ツ危険。

臥床九時半頃。

本日ハ、大護摩中大雨。夜中ハ止まつ降り。

第四日 九月七日 金 白十四日

起床六時、臥床八時。

八時半出。九時二十五分、大黒の窟、小篠の道場に向(昔時ハ宿坊三十余戸あり。一夜の宿料、五十銭なりしと。今日の五円カ)。峯中第一の行場。清水こんこんと流れり。本年ハ亀谷の尽力にて、三間^(カ)に三間半^(カ)の雨宿設立しあり。屋根不完全にて、金円の世話^(カ)を願出つ。岩本師帰院後、返答の事。葛湯の饗応あり。

大護摩(十時より勤行。即時修行。十時四十分畢)。

帰宿。十一時十分着宿(小生名ニて、洞川より、そは〔蕎麦〕粉二升持来。是ハ、洞川にて注文し置きしもの)。

一時半頃、岩本師、岩月地及上田ハ、帰郷の途ニ就く。

本日は、少々つゝ雨下れり。夜ふりて甚し。大坂 伊藤福太郎、播磨 正井市松、紀伊 滝本直蔵、三河~~水野鉄五郎~~、全て西三人、随行ヲ願ふ。許ス。

第五日 九月八日 土 白十五日

起床三時半、夜臥床八時。

□時半出発。六時十分、出発小篠。六時三十五分、阿弥陀森。六時五十分、脇宿。七時二十五分、普賢岳。全所にて経函石勤行。普賢岳へ碑伝納む。七時四十五分、笙窟^(カ)遥拝。全所□□弥勒尊、児泊^(カ)八時五十分、七ツ池、念仏橋。九時五分、七曜岳(俗に国見ヶ岳。少半中食)。十一時、行者還(碑伝を納む)。○時十分、一ノ多和宿(閼伽池あり)。いしのやすバ(知らさりし^(ママ)バ残念)。一時半、聖宝師。二時五分、弥山着宿。

本日ハ大護摩の処、雨天にて止め。

弥山に楠本信精一人居れり。

弥勒廻り、最も困難なりき。

本日、煙霧之為、一同衣類等、皆ぬれ大困難せり。楠本、ろ〔炉〕に火ヲ焚付け、かわかせり。

大ナル白犬、従ヒ来ル。山上ヨリ。

第六日 九月九日 晴快 日 黒大一日

四時半起床、夜八時。

大護摩(弥山、六時開始。六時四十分終。即時出発)。七時出発、七時~~に~~頂仙岳勤行。七時二十分、今宿勤行。七時四十分八経ヶ岳勤行。八時十八分、明星岳勤行。八時四十五分、菊ヶ窟勤行。九時五分、禪師宿勤行(半中食。余ハ不食)。五古嶺、船多和(相不分^(カ)通過)、七面山(十

時三十分、にく(けたもの)に逢ふ。きいうき
いうと鳴けり。十時五十分、楊枝宿勤行。ぶり
しやだけ。十一時三十五分、ゑんの鼻。仏生嶽、
鉄鉢岳等の下を経て、十一時五十五分勤行あ
り。一同中食(岩窟の下。清水滴ル)。○時二十
五分、馬脊勤行あり。○時四十分、釈迦岳勤行。
大休。一時二十五分、都津門。一時前鬼より二
人、迎ニ来。一時三十五分、深山着。勤行あり。

大護摩。一時四十分始、二時十五分終り。赤
飯之饗応あり。

二時三十五分、四天石下香(ママ)清水(ママ)。四時四十五分、
聖天森勤行(金剛童子)。四時四十八分、
五角山勤行。三日月石(此間ニツ面白き石あ
り)。三時五分、大日岳、鍔修行。三時十分、頂
上大日尊勤行。三時二十五分、セクラベ石、次
ニ千手嶽ノ南ヲ経て、三時四十五分、行者腰掛
石、制多迦、金伽羅(回りを廻ル。実に困難ナ
リ。余ハ何とも思ハサリギ(ママ))。四時二十分、妙間
〔妙見〕社。四時二十五分、小中坊着宿。

ゑんの鼻へ出ル道、夫より釈迦岳ニ登ル
道、殊ニ鉄鉢石の下、念仏橋、馬脊等危険
なり。両谷共ニ風景殊ニ宜シ。巖石樹立せ
る有様、絶奇々々。頂上にて諸方ヲ望めバ、
遠近之山、殊ニ高野・金剛・二上ヶ岳等を
望むべし。せいたか・こんからより下道、
恰も川辺の岩を歩ルか如く、汗出ツ。先ニ
荷物〔荷持ち〕、犬を連れ下シニ、「にく」
二足出シト云ふ。せくらべ石近傍之下より
北を望めハ、数十の大巖石樹立、絶奇々々。
夜、勤行あり。

第七日 九月十日 晴快 月 黒大二日

起床六時、臥床八時。

朝勤行ナス。

八時十分出発。裏行に向ふ。八時半、地藏菩
薩勤行。八時四十五分、垢離取りニテ游泳。九

時二十三分、白山谷、白山権現、ちようづ滝、
大黒窟。九時二十三分、行者關伽井、三宝荒神
滝。九時二十〇〇分、弁才天勤行。九時五十二分、
馬頭窟。九時五十五分、馬頭滝。十時五分、胎
藏界窟、金剛界窟勤行(全所に、出雲簸川郡神
西村大字大島二百一番戸、藤田義元、行ヲナン
居レリ)。護摩壇、塔婆塚、千手滝。十時十八分、
不動滝勤行(人々大なる石木等〇投ス。実ニ奇
観なりき。恰も百雷の落ル如シ)。十時二十分、
千手窟、不動窟。十時半、屏風の横駈け。十時
三十五分、二十八宿(水野鉄五郎、犬の頸をし
ばり、共ニ修行ス)。十時四十五分、鷲窟。弘法
大師之窟。馬頭窟ノ手前ノ高所にて余のみ中
食。他ハ皆帰坊後。本日ハ日光月光等の滝ヘハ
行かず。

裏行にハ、ひる〔蛭〕多々居れり。余も
左右二足共食らわれり。右ノ足の如きハ、
帰坊後、血の滴ルを見しに、大きくなりて
居れり。

裏行ハ凡て奇絶。垢取場、水ハ極冷寒な
り。殊に白犬の吾人の后を追ひて修行せし
ハ面白かりき。

本日ハ小中坊子息案内。中野ハ行かず。

下北山村大字前鬼山の住職人名

行者坊住職	少僧都	五鬼継義兼
森本坊	権少僧都	五鬼継義円
中之坊	権律師	五鬼上義正
小仲坊	中律師	五鬼助義貞

男合八人、女合十一人之由

他所より来り居住の者十名之由

当前鬼裏行場より三十丁程の下ニ、大滝と云
ふ大なる滝ありと云ふ。

本日、藤田義元、是より奥修行随行を願出。
早速許可す。

釈迦供(本日午后三時半頃より。本尊ハ黄金
物(ママ)にて、昔ハ釈迦嶽に有りしと云ふ)。

森本坊住職会釈に来ル（午後六時頃）。

第八日 九月十一日 火 黒小三日

起床四時、臥床八時。

五時四十五分出発。七時五十五分、奥もり嶽。八時二十分、子守嶽（池あり。畳二帖スキ程）。八時五十分、般若嶽。九時十五分、夫巖石なり、九時十五分、涅槃岳（大巖石アリ）。十時四十五分、乾光門（大杉あり）。十時五十分、蘭（太サ一ひろ半程。西三四丁ノ下ニ水あり）下にて第一中食。十一時半より十二時迄休（中食余一人）。一時より一時半迄休。二時五分、持経宿。三時三十五分、平地宿（大杉二本なり。四時迄休）。四時五十分、金剛童子。五時四十五分、怒田宿着。

宿にハ〔欠字〕等二人居れり。

屋根替之件、代修案之件、宿番順等之件。本日ハ道路篠之為、非常之困難をなせり。碑伝を納む。

第九日 九月十二日 雨天 水 黒小四日

起床五時、夜臥床八時。

六時三十五分出発。

採燈大護摩供（全宿而修行）。

七時二十五分、佐田辻金剛童子勤行。七時二十五分、行仙宿・仙ヶ嶽・四阿ヶ宿勤行。八時二十五分、檜ヶ宿・菊ヶ池・拝返・香精山・古屋宿・如意珠嶽等の勤行。午前十時半着宿（葛川森下へ）。

本日修行通行道ハ、篠に道を塞ぎ、とても刈らされは、奉通行ハ出来さる由により、無拋略し申候。

怒田迄従ひし白犬ハ、縁の無くなりしに

や、全宿より来さりし為、不審と思ひしに、后にて聞けば、宿之^(ママ)椽下に臥し為ニ、出立を知らさりしものならんと思^(ママ)もわる。

滝本直蔵ハ別れ（葛川森下にて）、明日玉置にて再会之事。

第十日 九月十三日 木 黒小五日

起床五時、臥床八時。

採燈大護摩供（森下方にて修行。七時頃より七時半頃迄）。

即時出発。九時十五分、玉置神社諸所勤行、小休。十時十分発。十時半、水呑宿。十時四十分、岸宿。十一時五十分、五大尊嶽。金剛多和・^(ママ)黒嶽等ハ行かす。

二時、切原、水本鹿蔵方へ着宿。

岩上源蔵及大峯熊吉等、相さづ^(ママ)に出づ。

岩上ハ下僕一人を連れ、かいすり迄出迎の処、道之咀唔せし為、引かし来りしもの。

岩上源蔵より、吹越山高祖堂及敷地、確定致し度旨願出。願出持帰。

第十一日 九月十四日 金 黒小六日

起床六時、臥床。

出発、八時三十分。八時五十分、吹越着（是より先、岩上、吹越に至り、万事整頓し出迎）。

大護摩（九時五分より九時五十分迄。添護摩五人。朝大雨之為、参拝者、平年之十分一の由。然れとも三十人程）

即時、坪井浅太郎之案内にて、十時五十分、敷屋へ着。中食。夫より舟にて熊野河を下ル。四時五分、牛鼻神社参拝。四時十五分、舟より下り、即時新宮参拝。四時十七分、佐々木天龍氏方へ着宿。

本日ハ朝ハ大雨にて、天気如何と案せし

に、八時半頃より止み、好都合なりき。新宮着后、六時頃より又雨降る。

本年ハ舟之都合等を慮り、本宮湯の峯を後にまはし、即時新宮へ下り、夫より大雲小雲を経、湯峯等へ参り、野山〔高野山〕へ参拝帰院之事ニ決定す。

舟中にて兩岸を眺むれば、数十の滝、大小ごうごうとして下ル。其奇観、云ふべからず。石炭之産出あり。十津より来ル川、泥土之為かにこり居れり。

第十二日 九月十五日 土 黒小七日

起床五時、臥床八時半。

七時出発。八時半、宮崎。九時十分、大休(海辺にて小石を拾へり)。十時半出発。十二時二十分、補陀洛寺(天武天皇勅願所)。二時半頃、那智滝。三時四十分、観音堂、次熊野神社参拝。雨降り出ツ。

滝ハ実ニ大ナリ。高サ五十丈、巾頂上八間、下方漸ク広シ。

本日、大雲越ゆべき筈之処、天气之都合及時間少々相成し為、大悲堂下の旅宿に泊す。

第十三日 九月十六日 日 黒小七日

起床三時半、臥床八時。

五時出発。大雲、小口村にて中食。小雲を経て、三時二十五分、湯峯、阿津満屋着宿。

大雲の下り及小雲之上リハ、最も険なりき。温泉、尤も好し。

本日、那智にて三河 水野鉄五郎ニ別る。琴平行と云ふ(舟にて)。

第十四日 九月十七日 晴快 月 黒小八日

起床五時、臥床八時半。

大護摩(午前七時より七時半五十分迄。添護摩、玉置良平、伊那浅吉)。

即時出発。八時二十分、音無川。八時三十五分、本宮へ参拝。后二時三十五分、十津川、はり金橋。六時、十津河村西中へ着宿。

湯峯にて、十津川村大字平谷、兼広屋宿、本山徒弟、栗栖正次の手紙を受。一宿を願度旨。

はり金橋之手前の在所迄、正次、迎ニ出。されと、正次方ハ新道之方にて、高野登山に不便に付、はり金橋にて別る。中野ハ坂本へ向ひ、五條にて十九日再会を約し、全所にて別る。

第十五日 九月十八日 晴快 火 黒小九日

起床三時半、臥床。

五時出発。ふるやぐら〔古矢倉〕峠を越へ、八時半、かんの川〔神納川〕(小休)。十一時、御箱峠〔伯母子峠〕。上西にて中食。三時、沢一軒屋。夫より北股。大滝着宿、五時四十五分。

本日ハ何も足痛等にて困難せり。

第十六日 九月十九日 晴 水 黒小十日

起床三時半、臥床九時。

四時卅五分出発。七時五分、高野山奥院。八時二十分、金堂内見覧。十一時、河根、ながや着。中食。一時、橋本着。二時半発の汽車に乘し、五條及高田に乗替、王子にて乗替。同所

にて伊藤及正井に別る。五時五十分、奈良着（京都聖門へ電報をうち、帰京報）。七時十分出発に乘し、九時七条着。田中氏、迎居。田村・渡辺及法具櫃ハ碗車、田中氏も。高田・辻ハ徒歩。十時二十分帰院す。

中野ハ遅れしものと見へ、五條に居さりき。多分、実家へ帰り、明日頃登山すべきか。